

ニュージーランド・スキー
(8/25 ~ 9/2)

清宮 政宏
武部 慎

その1. 日本脱出.

日本との時差はプラス3時間だが、日本では真夏の8月、南半球の New Zealand では真冬となる。G12にホロシャツ姿で成田を飛んで、約10時間 AIR NEW ZEALAND の機内食やドリンクサービスには満足しながらも、よく眠れぬまま到着したニュージーランド最大の都市オ克兰ドの朝は肌寒く、くもりと雨とどはじまった。

その2. KIWI ENGLISH.

さて、ニュージーランドに着いて、我々がすぐにやらなくてはならないこと...それは、タスマン氷河滑降のためのセスナ機の予約であった。そこで、さっそく、KIWI ENGLISH と対面することとなった。空港の INFORMATION で、“MOUNT COOK AIRLINE のフロントはどこ”と単純な質問をしただけだったが、相手は、かなりなまりの強い発音の高齢の女性で、お互いに言合っていることがよく理解できない。おまけに、我々は子どもと勘違いされたのか“これからどこへ行くの、エアチケットをみせこらんなさい”など話がどんどん複雑になってゆかりたつた。

いろいろと話すうちに、せとお互いが言合っていることが理解できるようになり、“今あなた方がいるのは国際線ロビーで、Mt Cook LINE のカウンターは、国内線ロビーに行かなくてはならない。すぐ前から連絡バスが出ている。2ドルかかる”といわれ、ようやく我々も納得。タスマン氷河のセスナのフライトの予約と、日本へ帰るフライトのリコンファームを行うことができた。

KIWI ENGLISH は、QUEEN'S ENGLISH などとくらべ、なまりはかなり強く、このおとも、“It's a good day for skiing.”などの day を [dei] ではなく、[da:ɪ] と発音するところなど、はじめの3日間くさいは、独特の発音を持つ KIWI ENGLISH にとまどいがちだった。

その3. New Zealand の道路事情.

夜のフライトにオ克兰ドのオ克兰ドから南島のクライストチャーチへと渡った我々は、翌朝より、日本では予約してあった AVIS レンタカーでカーをかり、マウントクック村に向けて出発した。クライストチャーチからマウントクック村まで

は、約300kくらいあり、日本での感覚でいえば"雪山"けども1日ばかりにな
てしまうのが、国道でも、街中でなければ"平均時速120kくらいのス
ピード"とばすことのできる"ニュージランド"では、マウントクックまでの途中に
あるゲレンデ、TEKAPO SKI FIELDで、滑る勘を戻すために約2時間く
らい過す余裕さえあった。

④. LAKE TEKAPO と TEKAPO SKI FIELD.

限りなく水色に澄んだ湖と遠くには頂上から雪をいただいた山。そして、
湖畔には小さな小屋がある…… 旅行代理店の"オア=ア"のパンフレット
には、そんなニュージランドの写真が、かならず一枚くらいはのっている。それは、
まさ、まちがいにテカポ湖である。

まるでよき国の物語に描く湖のような色を持つテカポ湖といえ、
国道から舗装されていない道を30数k、車では約40分のところに、テカポス
キ場があった。

ニュージランドでは、どのスキー場もそんなのだが、日本のように、ホテルを出れば
すぐゲレンデというようなスキー場はなく、宿泊するホテルなどのある町から、林道よう
な山道を車で1時間くらい登ったところにあるのが普通である。そのため、
雪質はとこもよく、気持ちよい滑降を楽しむことができる。しかし、一度天候が
くまると、スキー場は完全にクローズされてしまい、スキーのできる確率は60~70%
くらいである。

余設ではあるが、QUEEN'S ENGLISH では、スキー場を"SKI SLOPE"とい
うのが一般的で、"SKI FIELD"というのは、クロスカントリーなどの場合にのみ使くと
私が英会話を習っているカナダ人教師からは聞いたが、ニュージランドでは、一
般的なスキー場でも、"SKI FIELD"の呼び方で通じていた。

ともあれ、ニュージランドでの最初のスキーは、タスマン氷河スキーの前日、マ
ウントクックの途中で立ち寄った、このテカポスキー場で、青く輝くテカポ湖の向う
側にCook山を眺めながらのスキーとなった。

⑤. マウントクックとタスマン氷河

オランダで予約しておいた、タスマン氷河のバスツアーのフライトをテカポで
滑りて、"カンファーム"をしないままにならなさいた我々は、当日の朝、起きこ
ぐ、アルパインガイド、オクスンと出向いた。"OK"といわれ、安心してユースタイル
へ戻り、ゆくりと朝食をとる。

我々がくるまでの約5日間、天候が悪くセスト機が飛ばず、タスマン米河スキーができなかったというのがウソのように晴れ出たり、マウトクック村のエアポートからも Cook 山や、タスマン米河の下部がはきりと見渡せるほどだった。

タスマンサドルまで、マウトクック・エアポートからセストで約20分、約2400mのタスマンサドルは、さすがに風が冷たかった。我々の担当ガイドは、CHARLES HOBBS というガイドで、我々がスキーツアー用のブーツやビンディングを使っているのを見ると、“君たちもスキーツアーをやるのか”と訪ねてきて、自分のかぶっている帽子の“SOUTH POLE(南極)”というエンブレムをみせ、“私は南極点へいったんだ”と自慢気に話していた。ちなみに、我々のパーティーは総勢12~3人となったが、ガイド以外はすべて日本人ばかりだった。

タスマンサドルからは、雪にかくれたクレバスを避けるために、滑るコースも細かく指定されながら、約10K、セスト機のまわっているダウンスレートと呼ばれるところまで滑った。滑るとはいっても、レベルのずいぶん違うスキーヤーが、コースを指定されながら、ゆくりと、列にならぬ滑るので、それはまるでスキー遠足のようなものだった。

約10Kの1st Runが終わると、タスマンサドルへもどって風食。サンドイッチ、ピザ、スノー、チョコレート、オレンジジュースなどが出された。2nd Runは、1回目よりも、米河のより Cook 山側を回るコースで、ICE HALL なども見学しながらの滑降となった。しかし、午前中に比べ、気温もあがってきたせいも、雪質もあまりよくなってきた。

ダウンスレートからマウトクック・エアポートへの帰りのフライトは Cook 山直下のアクロバット飛行。体の中の血液が逆さに流れるような錯覚が直りかけた頃にマウトクック・エアポートへと着いた。

206. ワナカとハリスマウンテン

4時半にマウトクック村を出発し、7時すぎにならぬ我々はワナカに到着した。宿泊は予定通り、ワナカ・ユースホステル。管理人の年齢不詳の女性から、“You can't understand my English, can you.” といわれ、笑いつながら、“I can understand your English.” と言葉を返し、中へ入った。

どへ行っても日本人がいたとばかり、中々異国の人々の中に入ったという気持ちになった。ワナカYHには、2晩泊まることになったが、同宿の人たちも、日本人と話す機会はそれほどないらしく、和気あいあいとした中で彼らとも話し

をすることができた。

翌日、翌日は、ハリスマウンテンのハリスキーとなる。ワカカの町からやはり車で1時間ほど走ったところに、ハリポートはあり、個人用の無線機を1つずつ持たされ、ハリコブターで山の頂上へとあがった。私たちの担当ガイドは、女性で、我々2人の他にオーストラリア人の夫妻が1組、パーティーは合計5人であった。前日のタスマン氷河セストスキーとちがひ、この日は、他のパーティーも含め、総勢20人くらいだが、日本人は我々2人だけだった。雪質はといえば、おふくよく、部分的に悪くなっているところとどけは、2人とも、パウダースノーの中を、ウェーデルンで気持ちよく滑ることができた。

結局、1 Run 追加して合計6 Run 滑り、ハリポートへと戻った。30トビールをもらい、飲むと疲れが一気にでて、体が重く感じられた。

当初の目的であったタスマン氷河とハリスマウンテンを滑りおえた充実感がいっぱいだった。明日はすし朝食坊をしようなどといいながら、夜はぐっぐと眠ってしまった。

その7. カルドロナとウィンズタウン

カルドロナスキー場は、ワカカウィンズタウンのちょうど間にある。ガイドブックなどをみると、ワカカ周辺には、トリアルゴンとカルドロナの2つのスキー場があり、トリアルゴンは中上級 キーヤー向け、カルドロナは、リレックススキー向けとされている。トリアルゴンで滑りたい気持ちもあったが、滑りおえたあと、ウィンズタウンへ行きたいという気持ちもあり、カルドロナへと向かった。

国道からスキー場へとつながる山道で、自動車での入場料8ドルを払い、カルドロナへと登っていった。上部はやはり風が強く、少々寒く感じられたが、雪質はおふくよく、この日も、気持ちよく滑ることができた。スキー場の最上部のヒコフに登ると、ワカカ湖と、その湖畔に広がる街ウィンズタウンがみゆたせた。

ウィンズタウンでの宿泊も、ウィンズタウン YH となったが、ユースホステルは、ワカカ湖のすぐ湖畔にあり、夕刻、陽が暮れゆく中で、湖をぼんやりと眺めていると、体の中のモヤモヤしたものが、すべと抜け去り、こまうような気分だった。

翌日は、風まで、30ネットヒコフスキー場で滑ろうと当初考えおいたもの、あまりに疲れがたまっていた私は、もう滑りたくないと言った。翌朝は

街の中の観光にしました。今から思うと彼に申し訳ないこととしましたと思、ている。

その8. 帰路.

あちこちで滑りながら、南島と南へ南へと車を走らせた我々は、クイーンズタウンから途中、リタカと近したオアマルで宿泊し、クライストチャーチまで約1日半かけたり帰り、午後のクライストチャーチからオアランド行きのおAIR NEW ZEALANDへと乗った。

クライストチャーチ発が4時過ぎの飛行機だったのだが、フライトももうおそく夕方おそい時刻か夜のものと予約しておけば、当日の朝クイーンズタウンを飛ぶとも間に合い、もう一日ゆくりとコロネットヒークあたりでスキーができていたかもしない、今は少々悔しい。

“日本に戻りたくない”、“明日から社会復帰できるか心配だ”などと2人で言いながら、オアランドから成田行きの飛行機に乗り、乗った我々を待っていたのは、9月になったとはいえ、とほうもない日本の暑さだった。それは冠婚の良夢の中から、現実の世界へと強引につれこまらるのに充分な程の暑さだった。

その9. として今……

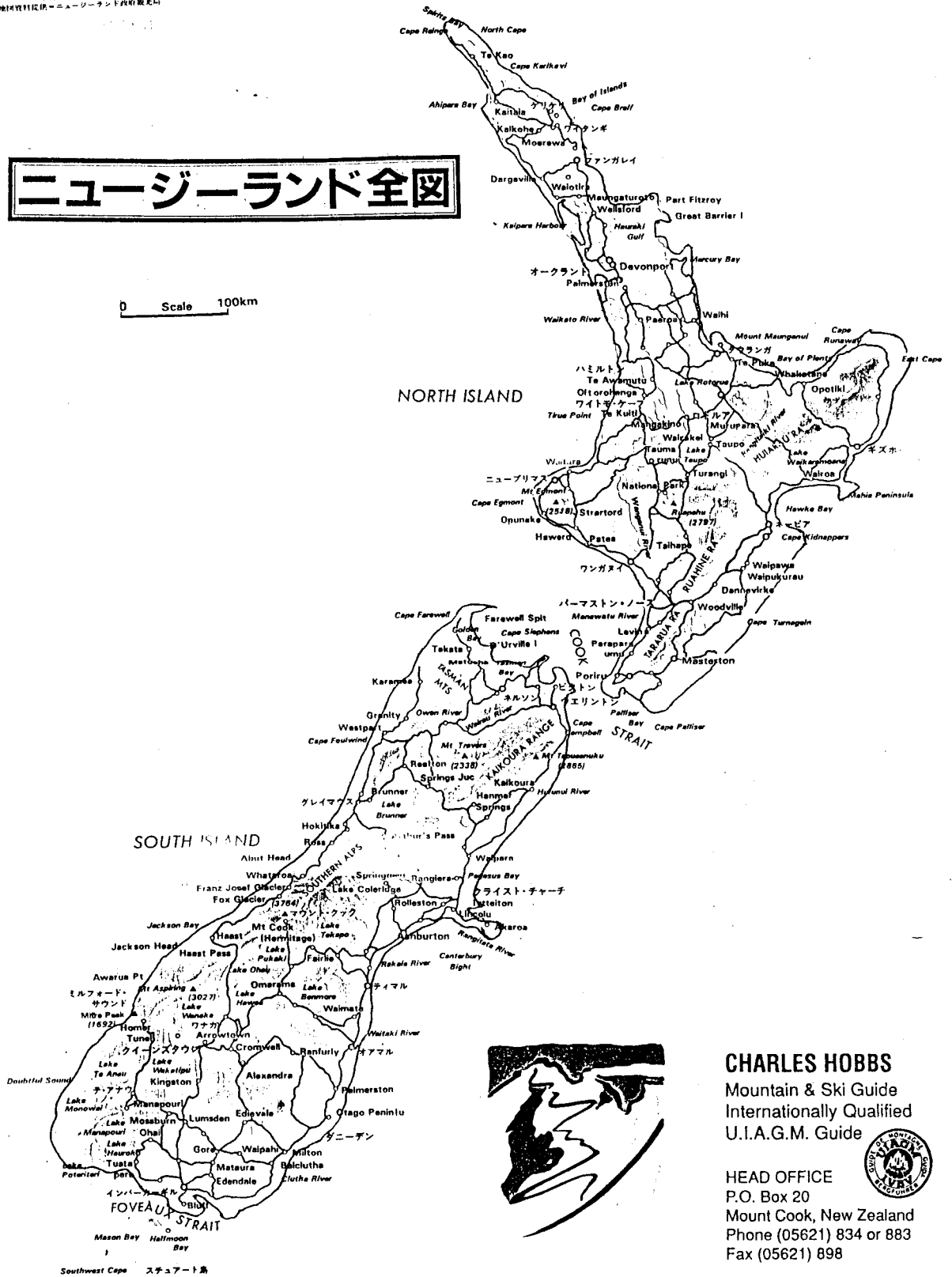
我々が滑ったタスマン氷河やハリスマウンテンでのスキーを目的とする旅行代理店主催のいわゆる“パッケージ旅行”というのは、もちろんあり、カタログなどをみると、セスタヤハリコスター料金と別にした、リアー料金は、65~70万円前後が相場である。それに比べると、我々は、その半額か、それ以下で行ってきたことになり、少々得をしたような気もしている。しかし、本当によかったと思、ているのは、YHなどを泊まり歩いたりして、日本語の全く通じない若者たちとも、交わる機会が持てたことだと思、う。

NEW ZEALANDは近いうちに、もう一度行きたい国である。

(清宮・記)

ニュージーランド全図

0 Scale 100km



CHARLES HOBBS
 Mountain & Ski Guide
 Internationally Qualified
 U.I.A.G.M. Guide



HEAD OFFICE
 P.O. Box 20
 Mount Cook, New Zealand
 Phone (05621) 834 or 883
 Fax (05621) 898

ALPINE GUIDES

METHVEN HELISKIING
 Phone (03) 302 8108 or 302 8774